

## 第2言語としての日本語のパーフェクトの習得

三村由美

### 要旨

本研究は、母語話者の言語運用に見られる系統的な可変性に近づく過程が第2言語の習得過程であるとするSystematic Variation Model (SVM) を理論的な枠組みとする、日本語のパーフェクトについてのリサーチである。実験の結果、未来と現在パーフェクトでは母語話者の間で一定の傾向を持つ多様性が観察された。学習者では初級よりも中上級のほうが母語話者の示す多様性に近いということが明らかになった。その一方で、日本語母語話者には見られない学習者に特徴的な傾向も観察され、この傾向が、第2言語としての日本語の学習者に普遍的なものであることが示唆された。

〔キーワード〕 Systematic Variation Model (SVM)、日本語のパーフェクト、第2言語の習得過程、母語話者の直感的判断、現在パーフェクトのヴァリエーションとしてシテイタ形式

### 1. はじめに

日本語では時を表す言語形式の数が少ない。文末にあってテンスやアスペクトを表す形式として、スル、シタ、シテイル、シテイタの四つが挙げられるが、これを英語などと比較してみるとその数の少なさを改めて認識させられる。しかし、自分自身の日常の言語生活を省みても、さまざまな時を表すことに不自由さを感じることはない。それは、数としては少ない言語形式が、共起する副詞や文脈によって、複数の機能を果たしているからである。

これまで動詞のテ形に「ている」の付いた形式は、おもに動詞の種類によって、＜動作の継続＞と＜結果の状態＞を表すとされてきた。しかし、同じ形式がこの二つだけではなく、パーフェクトも表していることが工藤(1989)によって明らかにされた。パーフェクトとは「ある場面が引き続き現在まで関わってくること」コムリー(1988:pp. 83-84)で、英語の完了形がその典型的な例である。

さて、工藤(1989)のパーフェクトは小説の文章を分析することで得られた結果である。言語資料の収集方法には、工藤(1989)のように予め完成された文章などから収集する方法と、実際の発話から収集する方法がある。基本的な規則

を取り出すためには前者の方法も有効であろうが、どのようなヴァリエーションがあるかを知るためにも、同じ方法が基本的な規則を抽出するときと同じ程度有効であるとは考えられない。筆者自身の日本語母語話者としての直観的判断では、工藤(1989)のパーフェクトには幾つかのヴァリエーションが存在するのではないかと思われた。そこでこのリサーチでは、日本語母語話者を対象に多肢選択方式の文法性判断テストを行い、母語話者が直観的判断によってパーフェクトとしてどの言語形式を選択するかを明らかにする。

つぎに問題となるのが、第2言語としての日本語の学習者が、パーフェクトをどの程度習得しているかである。前述のように動詞のテ形に「ている」の付いた形式は、＜動作の継続＞と＜結果の状態＞の二つの用法として教えられることが多く、パーフェクトとしての用法は取り立てて強調されることが少ないのではないかと考えられるからである。しかし日本での日常生活では、インプットの中に多量のパーフェクトが含まれているはずである。またパーフェクトは用法は違っても、言語クラスで正式なインストラクションを受ける＜動作の継続＞、＜結果の状態＞と形式は同じものである。この二つの理由から、パーフェクトは第2言語としての日本語の学習者にも、ある程度習得されていると考えられる。

それでは、どの程度習得されているのかということだが、ここに一つの第2言語習得モデルがある。それは、長友(1991)の Systematic Variation Model (SVM) で、第2言語の習得過程はその言語の母語話者の実際の運用に見られる系統的な可変性に近づく過程であるというモデルである。このリサーチではSVMを理論的な枠組みとし、母語話者の直感的判断の結果と学習者の解答結果を比較することで、第2言語としての日本語の学習者のパーフェクトの習得過程がどのようなものなのかをより明確にする。

## 2. 先行研究

### 2.1. Systematic Variation Model (SVM)

長友(1991)のSystematic Variation Model (SVM) は「が」「は」を対象にしたリサーチの結果から、母語話者の実際の言語運用には系統的な可変性が存在し、それに近づいていくのが第2言語としてその言語を習得する過程であるとするものである。学習者の母語が目標言語と類似した文法体系を有する場合は母語話者の示す系統的な可変性とほぼ同様な傾向を示し、そうではな

い場合は母語話者の系統的な可変性とは違った傾向を示すという。また、母語話者には見られず、学習者にしか見られない傾向というものもあり、さらに、母語話者の間でも世代によって違う傾向を示すということである。

## 2.2. 日本語のパーフェクト

パーフェクトは一般言語学的な文法範疇で、基準となる時点よりも前に起こったことが、引き続いて基準時点まで効力を持つことである。日本語では動詞に「ている」または「ていた」の付いた言語形式によって表されているとするのが工藤(1989)で、小説の文章の分析から、未来パーフェクトと現在パーフェクトは動詞+「ている」、過去パーフェクトは動詞+「ていた」が表すとしている。そしてこのうち現在パーフェクトはシタの形式、動詞のテ形に国文法で過去・完了の助動詞とされている「た」の付いた形式も表すことがあるという。そして、この形式は<完成相過去>と<パーフェクト相現在>の二つの機能を表すということである。<完成相過去>の典型的機能は、現在とは無関係に、複数の出来事との間の時間的な関係を表すことで、<パーフェクト相現在>の典型的機能は、他の出来事との関係は無視して、現在との関係づけにおいて、出来事を提示することであるという。この二つは、第一に結果・効力が持続しているか否か、またはそれが強いのか弱いのか、第二に出来事の成立した時点が明示されているかどうか、第三に時間的な隔たりの大きさの度合いという、三つの観点から見て連続的であり、三つの尺度のそれぞれどのあたりに位置するかによって、二つのうちどちらを表すかが決まるということである。

## 3. 実験

### 3.1. 実験の目的

はじめに、日本語母語者が直観的判断によって、未来パーフェクトと現在パーフェクトでどのような選択をするかを明らかにすることである。<sup>(1)</sup> つぎに、第2言語としての日本語の学習者の、未来パーフェクトと現在パーフェクトの発達過程を明らかにすることである。さいごに、SVMを枠組みとして日本語母語話者の直観的判断と日本語学習者の習得過程を比較し、両者の異同を明らかにすることである。

### 3.2. 被験者

日本語母語話者は合計で292人、そのうち1回目が34人、2回目が258人だった。

日本語学習者は合計で121人で、初級は33人、中級は50人、上級は38人だった。初級は学習時間が350時間まで、上級は日本語能力試験一級合格か、またはクローズテストで60問中40問以上が正解だった場合、中級は初級と上級以外とした。<sup>(2)</sup> また学習者の母語は、その約9割が韓国語で、残りの1割は中国語その他だった。

### 3.3. 素材

多肢選択方式の文法性判断テスト (Grammaticality judgements) を行った。問題は未来パーフェクト、現在パーフェクトともに継続動詞が1問、瞬間動詞が2問、合計で6問だった。

### 3.4. 方法

1回目の母語話者34人には最も的確だと思ふ選択肢を一つだけ、2回目の母語話者258人には許容できると思ふ選択肢を数に制限をつけずに選んでもらった。学習者には、最も的確だと思ふ選択肢を一つだけ選択してもらった。これは、レベルの異なる学習者の日本語のパーフェクトの発達過程をより正確に把握するためである。また、シテイルの選択肢は、すべての問題において、1回目の母語話者の9割以上によって選択された。

## 4. 結果

### 4.1. 未来パーフェクト

はじめに、未来パーフェクトの問題と解答の選択肢を示す。

#### 継続動詞

- A: 「ギリシャ語を習いたいと言っていましたね。」 B: 「はい。」  
A: 「わたしも勉強することにしました。一緒に習いましょう。」  
B: 「いいですね。いつからですか？」 A: 「10月からです。」  
B: 「時間がないと思います。そのころにはもう 1. 働きます  
2. 働きました 3. 働いています 4. 働いていました から。」

#### 瞬間動詞 1

- A: 「クラス旅行があります。一緒に行きませんか？来年の3月です。」  
B: 「そのころには、もうすでに国に 1. 帰る 2. 帰った  
3. 帰っている 4. 帰っていた と思います。」

#### 瞬間動詞 2

- コンサートに行くところ、電車が止まってしまった。  
アナウンス「事故のため、電車の運転を1時間ほど中止します。」  
A: 「どうしましょう？」  
B: 「タクシーで行きましょう。8時には会場に着きますよ。」  
A: 「8時では、コンサートはもう、1. 始まります 2. 始めました  
3. 始まっています 4. 始まっていました。」

つぎに、1回目と2回目の日本語母語話者の未来パーフェクトの解答を示す。

日本語母語話者の未来パーフェクトの解答

表1 1回目 34人

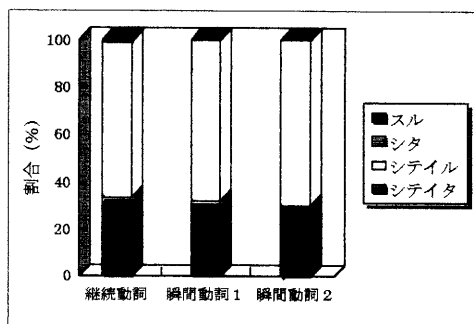
	継続	瞬間1	瞬間2
スル	1	1	1
シタ	0	0	0
シテイル	33	33	33
シテイタ	0	0	0
合計	34	34	34

表2 2回目 258人

	継続	瞬間1	瞬間2
スル	121	110	99
シタ	1	6	3
シテイル	240	245	238
シテイタ	1	1	1
延べ人数	363	362	341

表1からも明らかのように、未来パーフェクトを表す言語形式として、シテイルの形式が9割以上の割合で選択されている。しかし表2と図1に示したように、許容できる選択肢を複数選択した場合、スルの形式が3問すべてにおいて、シテイルの半分近くの割合で選択されている。

図1 母語話者の未来パーフェクト



つぎに、日本語学習者の未来パーフェクトの解答を数値とグラフで示す。

表3 日本語学習者の未来パーフェクトの解答

	初級 33人			中級 50人			上級 38人		
	継続	瞬間1	瞬間2	継続	瞬間1	瞬間2	継続	瞬間1	瞬間2
スル	11	12	11	17	10	13	9	10	13
シタ	7	11	7	1	21	21	1	9	9
シテイル	12	8	10	28	16	13	25	14	13
シテイタ	3	2	4	4	3	3	3	5	3
無回答	0	0	1	0	0	0	0	0	0
合計	33	33	33	50	50	50	38	38	38

図2 初級の未来パーフェクト

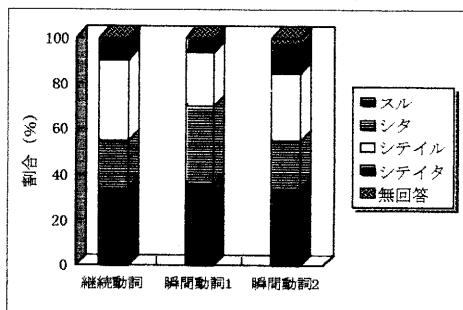


図3 中級の未来パーフェクト

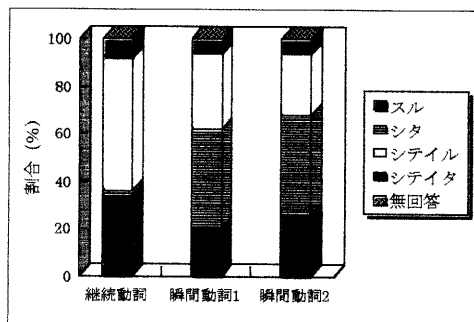
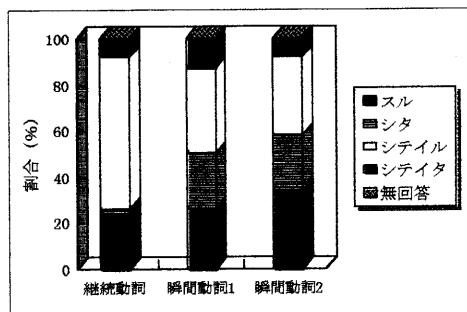


図4 上級の未来パーフェクト



継続動詞では、どのレベルでもシテイルの形式のほうがスルの形式よりも高い割合で選択されている。

瞬間動詞ではシテイルとスルの割合という点で中級と上級に類似した傾向が見られる。問題1ではシテイル、スルという順だが、問題2では両者は同じ割合になっているという点である。しかし中級ではシタの割合が非常に高い。上級であ

っても、三番目の選択ではあるものの、シタは継続動詞の時よりも割合がかなり高くなっている。同じ瞬間動詞でも初級では、問題1でスル、シタ、シテイル、問題2ではスル、シテイル、シタという順である。初級でもシタの割合が高いという点は中上級と共通するが、スルがシテイルよりも割合が高いというのは中上級と違う点である。

問題ごとに三つのレベルのシテイルと、それ以外の選択肢の選択される割合を比較するために $\chi^2$ 検定を行ったところ、継続動詞では人数の偏りが有意であった( $\chi^2(2)=6.33, p<.05$ )。しかし、瞬間動詞1と瞬間動詞2では有意ではなかった(1):( $\chi^2(2)=1.32, p>.05$ )、(2):( $\chi^2(2)=1.14, p>.05$ )。これは継続動詞でシテイルの選択される割合が、初級から中級、そして上級とレベルが上がるにつれて高くなっているためである。したがって、未来パーフェクトでは、瞬間動詞の時よりも継続動詞の時のほうが習得が順調に進むと言える。

#### 4.2. 現在パーフェクト

はじめに、現在パーフェクトの問題と解答の選択肢を示す。

##### 継続動詞

- A: 「こんど、この本を使って日本語を勉強しようと思います。」  
 B: 「その本なら、先月から 1. 使います 2. 使いました  
 3. 使っています 4. 使っていました。」

##### 瞬間動詞1

- A: 「さあ、今からクラス委員を決めましょう。」  
 B: 「それなら、先週から 1. 決まります 2. 決めました  
 3. 決まっています 4. 決まっていました。」

##### 瞬間動詞2

- A: 「2時間ほど前から雨が降ってきましたね。カサはありますか？  
 貸しましょうか？」  
 B: 「どうも。でも、雨はさっきから 1. 止みます 2. 止みました  
 3. 止んでいます 4. 止んでいました。」

つぎに、1回目と2回目の日本語母語話者の現在パーフェクトの解答を示す。

日本語母語話者の現在パーフェクトの解答

表4 1回目 34人

	継続	瞬間1	瞬間2
スル	0	0	0
シタ	0	1	2
シテイル	33	31	31
シテイタ	1	2	1
合計	34	34	34

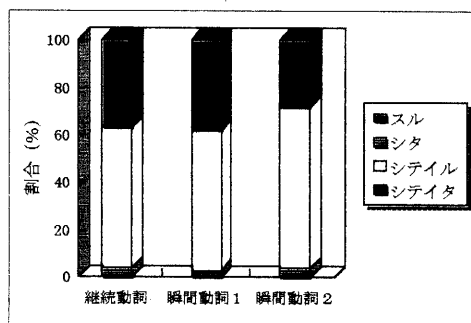
表5 2回目 258人

	継続	瞬間1	瞬間2
スル	1	0	1
シタ	17	12	13
シテイル	232	230	237
シテイタ	146	147	98
延べ人数	396	389	349

表5からも明らかなように、現在パーフェクトを表す言語形式としてシテイルの形式がほぼ9割以上の割合で選択されている。しかし表6と図5に示したように、許容できる選択肢を複数選択

した場合、シテイル以外の選択肢も選択肢も選択されている。また、シタの形式も一定の割合で選択されている。先行研究の一つである工藤(1989)では、現在パーフェクトを表す言語形式にはシテイルの形式とシタの形式があることが述べられていた。シタの形式が現在と切り離された<完成相過去>を表すか、または<パーフェクト相現在>

図5 母語話者の現在パーフェクト



を表すかは、結果・効力の有無と強弱、出来事時点の有無、時間の隔たりの大きさによって決まるということであった。問題のうち時間の隔たりは問題3が最も小さく、結果・効力は問題2に比べて問題1と問題3のほうがより明確に意識しやすいのではないかとと思われる。いずれにしても、母語話者の間では未来パーフェクトよりも現在パーフェクトのほうが許容範囲が広いと言える。

つぎに、日本語学習者の未来パーフェクトの解答を数値とグラフで示す。

表6 日本語学習者の現在パーフェクトの解答

	初級 33人			中級 50人			上級 38人		
	継続	瞬間1	瞬間2	継続	瞬間1	瞬間2	継続	瞬間1	瞬間2
スル	3	3	3	0	3	1	0	2	0
シタ	7	11	10	4	15	20	4	10	11
シテイル	19	11	14	38	11	20	21	14	18
シテイタ	4	8	6	8	21	9	13	12	9
無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	33	33	33	50	50	50	38	38	38

図 6 初級の現在パーフェクト

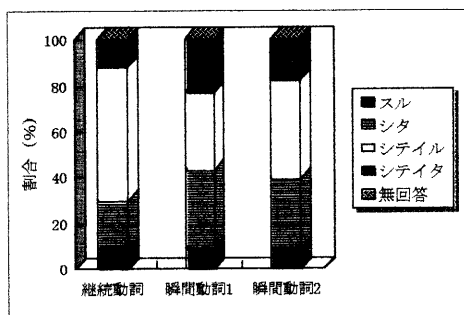


図 7 中級の現在パーフェクト

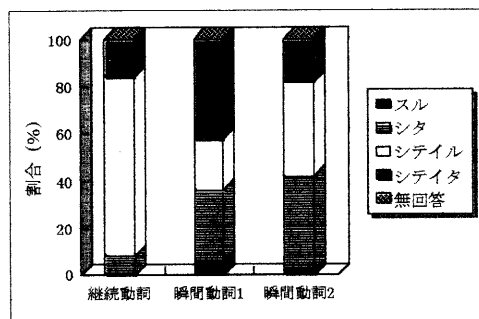
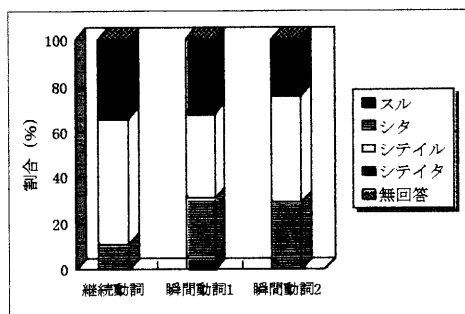


図 8 上級の現在パーフェクト



継続動詞では中級と上級が母語話者と同じように、一番目にシテイル、二番目にシテイタ、三番目にシタを選択している。一方初級では、シテイルを一番目を選択しているものの、二番目にシタをしている。

瞬間動詞 1 では上級がシテイル、シテイタ、シタの順で最も母語話者に近い。

一方初級はシテイルのつぎがシタで、シテイタは三番目である。中級はシテイタの割合が最も高く、そのつぎがシタ、シテイルは三番目である。瞬間動詞 2 では、すべてのレベルがシテイル、シタ、シテイタの順だが、シテイルとシテイタ割合は上級が最も高く、学習者の中では上級が母語話者に最も近いと言える。中級と初級はシテイタの割合は同じだが、シタの割合では中級のほうが高くなっている。ただし、スルを選択した割合は、初級のほうが中級よりも高い。

問題ごとに三つのレベルのシテイルと、それ以外の選択肢の選択される割合を比較するために  $\chi^2$  検定を行ったところ、継続動詞では人数の偏りが有意傾向であった ( $\chi^2(2)=4.99, p<.10$ )。しかし、瞬間動詞 1 と瞬間動詞 2 では有意ではなかった (1): ( $\chi^2(2)=2.55, p>.05$ )、(2): ( $\chi^2(2)=.48, p>.05$ )。これは、中級の学習者が継続動詞でシテイルを選択した割合が高いためである。さらに継続動詞のシテイタの割合は、上級、中級、初級の順であった。以上のことから現在パーフェクトでも、瞬間動詞の時よりも継続動詞の時のほうが習得が順調に進むと言える。



## 5. 考察

このリサーチではある特徴的な学習者の傾向が明らかになった。それは動詞の種類の違いによって、選択されやすい言語形式が違うということである。未来パーフェクトでも現在パーフェクトでも、動詞が継続動詞のときはパーフェクトの習得が順調に進むのに対して、動詞が瞬間動詞の場合は初級と中上級を比較しても、パーフェクトの習得が大きく進んでいると言うことはできない。それは、未来パーフェクトでも現在パーフェクトでも、動詞が瞬間動詞の場合は、学習者はシタを選択するという顕著な傾向が見られたからである。

シタの形式は学習者だけでなく、母語話者のヴァリエーションでも観察されている。現在パーフェクトでは3問すべてにおいて、少数ではあるがシタが選択されている。長友(1991)では、母語話者の間でも世代によって違う傾向を示すことが指摘されている。30、40代という成人と中学生とを比較すると、項目によっては解答が異なり、学習者の被験者と同じ解答を選択するのは、母語話者の中学生の被験者であった。このリサーチでも、2回目の母語話者の被験者の中には約80人の中学生が含まれていた。現在パーフェクトでシタを選択したのは、おもにこれら中学生の被験者であった。母語話者のヴァリエーションは、世代によっても多少違いがあるという、長友(1991)と同様の結果である。

しかし、学習者は中上級の場合でも、動詞が瞬間動詞の場合は未来パーフェクトと現在パーフェクトの両方で、シタを非常に高い割合で選択している。未来パーフェクトではヴァリエーションとしてシタをほとんど選択しない母語話者と比較すると、学習者の示す傾向がより顕著になると思われる。このように、第2言語としての日本語の未来と現在パーフェクトの習得では、動詞が瞬間動詞のときシタが選択されやすいというのが特徴的である。その理由としては、瞬間動詞+「ている」という言語形式そのものの性質が考えられる。この形式は「た」が付いて表す事態の完了を前提としており、瞬間動詞+「ている」の表す意味のこのような重層性のために、シタとされやすのだと考えられる。また、共起する時の副詞によっても、シタが後続する場合とシテイルが後続する場合があって、混乱を起しやすいためである。

またSVMでは、学習者の母語の影響が明らかにされている。日本語と類似した文法体系を持つ韓国語母語話者と日本語母語話者とは相関性が高いが、文法体系の離れた中国語母語話者と日本語母語話者との相関性は低いという、類型論的な観点から見た母語の影響である。このリサーチの被験者は約9割が韓

国語母語話者だが、未来パーフェクトと現在パーフェクトで瞬間動詞をシタとするというのは、韓国語の影響なのであろうか。パーフェクトと同じ形式によって表される<動作の継続>と、<結果の状態>の習得を研究したものに黒野(1995)がある。ここでも<動作の継続>よりも<結果の状態>のほうが習得されにくいこと、<結果の状態>がスル->シタ->シテイルという過程で発達することが明らかにされているが、被験者には韓国語母語話者は一人も含まれていない。したがって、瞬間動詞に「ている」の付いた形式がシタとされやすいのは、第2言語としての日本語の学習者に普遍的な傾向だと考えられる。全体的な学習段階が進んでも、スル->シタ->シテイルという発達過程の、シタの部分が長く残ってしまうのである。

さらに長友(1991)では、有標性(markedness)という概念を取り入れている。可変性を引き起こしやすい機能が有標(marked)、引き起こしにくい機能は無標(unmarked)ということである。ここでも同じ概念を当てはめると、同じように「ている」が付く形式であっても、継続動詞の場合は習得されやすいので無標(unmarked)、瞬間動詞の場合は習得されにくいので有標(marked)とすることができる。

リサーチ全体を概観すると、母語話者の直観的判断によれば、未来パーフェクトではスル、現在パーフェクトではおもにシテイタ、そして少数のシタというヴァリエーションが存在する。これらのヴァリエーションは、第2言語としての日本語の学習者の間でも観察されるが、母語話者の示すヴァリエーションの広がりにより近いのは初級よりも中上級の学習者である。本研究の理論的な枠組みである長友(1991)のSystematic Variation Model (SVM)の提唱するとおり、第2言語の習得過程はその言語の母語話者の示す系統的な可変性に近づく過程であると言える。

最後に現在パーフェクトのヴァリエーションとしてのシテイタの形式について考えてみたい。4,5人の日本語母語話者を対象にアンケートを行ったところ、現在パーフェクトのヴァリエーションとしてシテイタ(一人のみシタ)を選択し、シテイタを選択した全員が選択肢の表す語感として「事態が完了していることを強調している」という選択肢を選択した。またシテイルの語感としては「事態が継続して影響を及ぼしている」という選択肢を選択した。国文法では「た」を過去・完了を表す助動詞としているが、シテイタというのは、「事態が継続して影響を及ぼしている」ことを表すシテイルに、しかし事態そのもの

は出来事としてすでに「完了」していることを強調しようとするときに選択されているのではないかと考える。

## 6. まとめ

日本語母語話者の間では、未来パーフェクトでシテイルとスル、現在パーフェクトでシテイルとシテイタ、少数のシタというヴァリエーションが観察された。日本語学習者の間でも同様のヴァリエーションが見られたが、学習段階によって学習者を大別すると、初級よりも中上級の学習者のヴァリエーションのほうが母語話者の示すヴァリエーションに近く、SVMの示すとおり、第2言語の習得過程は、その言語の母語話者の系統的な可変性に近づく過程であった。また学習者の場合、継続動詞の時のほうが瞬間動詞の時よりもパーフェクトが習得されやすかった。瞬間動詞の場合、未来でも現在パーフェクトでも、学習者はシタを選択する割合が高かった。先行するリサーチとの比較からこれは特定の母語の影響ではなく、第2言語としての日本語の学習者に普遍的な傾向であることが示唆された。

本稿は、1998年にお茶の水女子大学に提出した修士論文の一部に訂正、加筆したものである。

## 注

(1)過去パーフェクトについては動詞に接続するのが「ていた」で「ている」の接続する他の二つのパーフェクトとは問題の性質が異なるため、ここでの調査からは除くこととした。

(2)大野他(1996)と同じテストを用いた。ここでは60点満点中40点以上正解の場合、1%水準で初級との間の有意差が認められている。

## 参考文献

1. 大野早苗他(1996)「予測文法研究－後続文完成課題から見た日本語母語話者と日本語学習者の予測能力について－」「日本語教育」91号 pp. 73-83
2. 工藤真由美(1989)「現代日本語のパーフェクトをめぐって」言語学研究会編「ことばの科学3」むぎ書房 pp. 54-118
3. 黒野敦子(1995)「初級日本語学習者における「－テイル」の習得について」

「日本語教育」87号 pp.153-164

4. ハーナート・コムリ(1988)「アспект」 山田小枝訳 むぎ書房 pp.83-84

5. 長友和彦(1991)「談話における「が」「は」とその習得について

-Systematic Variation Model-」 「第4回日本語シンポジウム：言語理論  
と日本語教育の活性化」 pp.10-24

(ゼウス外語学院)